

『浄土三部経大意』の撰述者に関する諸問題

——特に五種類の写刊本を比較して——

坪 井 俊 映

目 次

- 一 はじめに
 - 二 『三部経大意』が説く本願の意趣
 - 三 『三部経大意』が説く三心釈
 - 四 『三部経大意』撰述者の推定
 - 1 本願の釈義について
 - 2 三心釈について
 - 五 『三部経釈』（元亨版『三部経大意』）の章句の改変
 - (1) 第十八願と他の本願
 - (2) 願成就文について
 - (3) 十方衆生に対する考え
 - (4) 衆生摂化について
 - 六 五種類の写刊本の比較対照について
- 附 録 『三部経大意』の全文の比較対照

一、はじめに

『浄土三部経大意』はまた『三部経釈』、『三部経釈』とも呼ばれ、現在、写本刊本合して五本あり。写刊年次の古いものより列記すると、一、『浄土三部経大意』（金沢文庫蔵、以下金沢文庫本と呼ぶ）、二、『三部経大意』（親鸞全集所収、以下親鸞書写本と呼ぶ）^①、三、『三部経釈』（元亨版和語灯録所収、以下元亨版と呼ぶ）、四、『三部経釈』（寛永版和語灯録所収、以下寛永版と呼ぶ）、五、『三部経釈』（正徳版和語灯録所収、以下正徳版と呼ぶ）である。

そのうち『金沢文庫本』には末尾に源空撰なる撰者名があり、『元亨版』には初めに黒谷作なる作者名を記している。『親鸞書写本』には撰者名、作者名を記述していない。しかし了慧が収録した『黒谷上人語灯録』（和語）巻一の初めに収められているから、古くから法然上人のものとされていたのである。

しかしながら、五本の内容を比較検討するに『金沢文庫本』と『親鸞書写本』とは類似し、『元亨版』と『寛永版』と『正徳版』とはほとんど同じであるが、『金沢文庫本』と『元亨版』とを比較すると『元亨版』には内容上に大きな削除と改竄が見られる。さらに最古の写本と思われる『金沢文庫本』の内容を見るに、法然上人（以下敬称を略す）の『選択集』を初めとして、その他の語録に見られない異説が処々に記されている。これについて既に『三部経大意に見られる非法然的教説について』と題して発表（仏教文化研究所年報、創刊号）し、（一）弥陀如来の衆生廻向説、（二）至誠心釈の下に出る「凡所施為趣求亦皆真実」の文に対する釈義、（三）光明と名号の因縁説、（四）至誠心の自力他力の釈義、（五）浄土願生心の菩提心説、（六）浄土の九品差別説等について論じ、これらの諸説は法然の『選択集』等のものにみられないものであって、法然門下のうち隆寛、親鸞の教説の中に同説または類似せる考えのあることを指摘した。

しかし、なおこのほかに法然の考えと異なったものが見られるのみならず、『元亨版』に大きな改竄の後が見られ

て、元來法然のものでなかったもの——門人のだれかが記述したと思われるものを、強いて法然のものにするために文章意趣を改変したのではないかと思われるものも見られる。よって、前号にて『金沢文庫本』と『親鸞書寫本』および『元亨版』『正徳版』等を比較すると自流の教説に都合良きように改変されたところも見られるので、嚴密な比較研究がなされねばならないが、今は問題を残す」と記しているので、残したところの非法然的なものと、撰述者に関する問題とさらに文章の改変について論ずることにする。

二、『三部經大意』が説く本願の意趣

『三部經大意』の内容を検討するにあたり、『金沢文庫本』は「建長六年（一二五四）甲寅五月十五日 於平針郷新善光寺書了」の書写年次を有し、法然滅後四十二年の古写本であり、後に書写刊行された諸本の原本的なものと思われるから、これによって先づ初めに本書の主旨とする本願に対する考えを見ることが出来る。

本書は初めに『無量壽經』に説く本願について、

「雙卷經ニハ先阿弥陀仏ノ四十八願ヲ説キ、次ニ願成就ヲ明セリ」（30頁）（以下五本比較対照文の頁数を記す）とあつて、本願成就を中心に論ぜんとするもののようである。その本願について

「凡諸仏ノ願ト者、上求菩提下化衆生ノ心ナリ、アル大乘經ニ云ク、菩薩ノ願ニ二種アリ、一ハ上求菩提 二ハ下化衆生ノ意也、上求菩提ノ本意ハ衆生ヲ濟度シヤスカラムカ為也ト云ヘリ、然ハ只タ本意下化衆生ノ願ニアリ、今弥陀如来ノ国土ヲ莊嚴シ給シモ衆生ヲ引摂シヤスカラムカ為也」（32頁）

といつて、阿弥陀仏が四十八願を建てられた本意は下化衆生のためであるとして、仏の衆生摂化の面が強く説き出されていることに注目すべきである。

法然は『選択集』において法蔵菩薩の四十八願の成就について問答をもうけ、その答えに、

「答、法蔵誓願一成就何者極樂界中既無三惡趣一當知是則成就無三惡趣之願也、何以得知即願成就文云亦無地獄餓鬼畜生諸難之趣是也、……加之願終云若不爾者不取正覺一而阿弥陀仏成仏已來於今十劫成仏之誓既以成就云云」

と説いて、四十八願成就の阿弥陀仏であることを説いている。しかしこの願成就はいうまでもなく、一切衆生をひとしく迎えるためのものであるが、法然では上求菩提の成就、別言すれば願成就の仏については説かれているが、誓願を成就した仏の下化衆生の面は、説かれるところをあまり見出すことができない。

法然は從來、聖道門諸家が阿弥陀仏を以て劣応身、その淨土を凡聖同居土と判じ、また大日如來の一徳を司どる仏と考えたり、己身の弥陀唯心の淨土と見られていた阿弥陀仏を、本願成就の仏であり、指方立相の淨土たる西方に在す報身仏とし、しかも易行念仏による万人平等救済の仏としての仏格を確立されたところに、法然の阿弥陀仏觀の特質が見られる。したがって、この『三部經大意』が説く阿弥陀仏の下化衆生の面が強く説かれるのは、法然の阿弥陀仏觀を前提とした教説であることはいうまでもない。

さらに称名念仏についてみるに、法然は『選択集』において、称名念仏は阿弥陀仏が第十八願に誓われた行であり、一切衆生を平等に往生せしめるために易勝の念仏をもって本願とされ、諸行を本願とされなかったことを説きあかしている。これは從來、称名念仏をもって劣機に対する劣行とされ、また觀念成就のための方便行、或は神呪的な意味をもつ功德行とされていたものに、称名は本願に誓われた行であるという新しい意味と万人が平等に救済される価値ある行であるとしたところに法然の念仏往生説の特色を見るのである。

『三部經大意』が本願念仏を重視することは『選択集』の考えと同じである。即ち、第十八願について、

「此中ニ衆生、彼国ニ生スヘキ行ヲ立給ヘル願ヲ第十八ノ願トス、設我得仏十方衆生……誹謗正法ト云、凡四十願ノ中ニ此願殊ニ勝タリトス、其故ハ彼国ニ若生ル、衆生ナクハ悉皆金色ノ願モ無有好醜ノ願モ何ニヨリテカ成就セム」

といつて、第十八念仏往生の願を重視することは、法然の考えと同じであるが、往生の正因たる称名について、

「弥陀如来ハ因位ノ時、専ラ我名ヲ念^セム者ヲ迎^ヘント誓給ヒテ、兆戴永劫ノ修行ヲ衆生ニ廻向し給」(33頁)

とあつて、法藏比丘の上求菩提の菩薩道の功德を称名念仏する衆生に廻向されることを説いている。かかる阿弥陀仏の廻向(下化衆生)の考えは、法然の念仏往生説では見ることができない。さらに本願の第十二願、第十三願、第十七願においても『三部經大意』の著者は下化衆生の願として取扱つてゐる。即ち、第十二光明無量の願について、『觀經』に説く「光明遍照十方世界云云」の文を引いて、

「濟度衆生ノ願ハ平等^ニシテ、差別有ル事ナケレトモ、無縁衆生ハ利益ヲカ^フル事アタハス、此故ニ弥陀善逝、平等慈悲ニ催サレテ、十方世界ニ遍ク光明ヲ照シテ、一切衆生悉ク縁ヲ^結ハシメンカタメニ光明無量ノ願ヲ立給ヘリ、第十二ノ願是也」(38～39頁)

とある。第十二光明無量の願は一般に摂法身願とされるものであるが、これは光明による衆生結縁の願とし、摂衆生願としてゐる。

さらに第十三壽命無量願についても同じ意趣が見られ、

「又此願久シテ衆生ヲ濟度セムカ為ニ壽命無量ノ願ヲ立給ヘリ、第十三願是也」(41頁)

とあつて、摂法身願とされる壽命無量願も摂衆生願として取り扱つてゐる。

さらに第十七願について見るに

「其ノ名号ヲ往生ノ因トシ給ヘル事（第十八願）」ヨ一切衆生ニ遍ク聞カシメムカ為ニ諸仏称揚ノ願ヲ立給ヘリ、第十七ノ願是也（39頁）

と説いて、摂法身願とされる第十七願も摂衆生願として取り扱い、第十八願の念仏往生を一切衆生に聞かしめる願としている。そして、そのいうところの第十八願は、

「次ニ名号ヲ以テ因トシテ、衆生ヲ引摂セムカ為ニ念仏往生ノ願ヲ立給ヘリ、第十八ノ願是也」（39頁）

と説いて、第十八念仏往生願を名号による仏の引摂の願とする。そして更に第十九願について、

「如レ此種々ノ礙ヲ除カ為ニ、シカシ臨終ノ時ニミツカラ菩薩聖衆圍繞シテ、其人ノ前ニ現セムト云フ願ヲ建テ給ヘリ、第十九願是也」（43頁）

とあって、臨終における邪業の礙を除くために菩薩聖衆と共に来迎する願という。

このように四十八願の中より第十二、第十三、第十七、第十八、第十九の五願を出しているが、いずれも摂衆生願として取りあげて、本願を成就した阿弥陀仏の下化衆生の面よりこの五願をみている。これは注目すべき説である。この考えは善導が『往生礼讃』において「光明名号摂化十方」と説く考えを、五願によって具体的に説明したものと思われるが、法然の『選択集』等には見られぬ考えである。

三、『三部経大意』に説く三心釈

『三部経大意』は、善導が『観経疏』散善義に説く三心釈を随時引用した詳細な釈義をほどこしている。これは本書が本願と並んで解明する主旨とするものである。五種類の写刊本のうち至誠心釈を細釈して自力他力の心を説くところの文は、『元亨版』『寛永版』『正徳版』には全文がはぶかれている。さらに『金沢文庫本』と『親鸞書写本』との間に

はこの解説に前後するところが見られるがほとんど同文である。これは凡らく筆写せし時の転写誤りと思われる。いま『金沢文庫本』によりて、三心釈を見るに、初めに、

「三心ハ区二分レタリト云ヘトモ、要ヲ取り詮ヲ選テ是ヲイヘハ深心一ニ□ヲサマレリ」(44頁)

とあって、三心の詮要は深心であるといつて、三心のうち深心(信)を基として論ずることをあかしている。

初めの至誠心について、総別二種の至誠心のあることをあかし、総の至誠心について、

「惣者自力ヲ以テ定散等ヲ修シテ往生ヲ願フ至誠心也……其故ハ□ノ疏ノ玄義分ノ序題ノ下タニ云ク、定即慮ヲヤメテ以テ心ヲコラシ、散ハ即悪ヲ廃シテ以テ善ヲ修ス、此ノ二善ヲ廻シテ往生ヲ求ムナリ、……自他ノ諸悪ヲステ、三界六道ヲ毀厭シテ、皆スヘカラク真実ナルベシ、故ニ至誠心ト名クト云ハ是惣義也」(46頁52頁)

といつて、自力の心をもって定散二善を修し、この二善を廻して往生を願う真実心を惣の至誠心という。別の至誠心とは

「別者他力ニ乗テ往生ヲ願スル至誠心也」(46頁47頁)

という。他力とは阿弥陀仏の本願力のことであって、善導が至誠心を釈して、「一切衆生、身口意業所修解行必須真実心中作、不得外現賢善精進之相、内懷虚仮」といえる文を引いて、文中の「解行」を釈して

「其ノ解行ト者、罪惡生死ノ凡夫、弥陀ノ本願ニ乗シテ十声一声ニ決定シテ生ルトヘシト真実ニサトリテ行スル是也」(47頁48頁)

といつて、信機信法の二種深信を真実に信ずる心か他力の至誠心であるとしている。そして、

「外ニ本願ヲ信スル相ヲ現シテ、内ニ疑心ヲ懷ク、是ハ不真実ノ心也、虚仮ノ心也」(48頁)

といつて、本願の信不信について至誠心の真実不真実を説きあかしている。

この『三部經大意』の重視する至誠心は他力の至誠心であることはいうまでもないが、自力の至誠心について、

「此ノ釈ノ如ク一切ノ菩薩ト同ク、諸惡ヲステ行住坐臥ニ真実ヲモチハ惡人ニアラス、煩惱ヲハナレタル物ナルヘシ、……何況一分ノ惑ヲモ断サラム罪惡生死ノ凡夫、イカニシテカ此真実心ヲ具スヘキヤ、此故ニ自力ニテ諸行ヲ修テ、至誠心ヲ具セムトスルモノハ專ラカタシ、千カ中ニ一人モナシト云ヘル是也」(52～53頁)

と説いて、惣の至誠心、自力の至誠心は凡夫には具し難きものとしている。

このように至誠心を自力他力に分けて論ずることは法然に見られない説であつて、法然は善導の釈を全面的に受け容れて、凡夫のおこす真実心とし、『往生大要鈔』には、

「深心も廻向発願心もまことなるを至誠心となづくる也」

といい、また、

「所詮はたゞわれらごときの凡夫、をの／＼分につけて、強弱真実の心をおこすを、至誠心となづけたるとこそ、善導の釈の心は見えたり」

とあつて、いかに罪惡生死の凡夫であつても、その分齊に応じ強弱の異なりはあつても、真実心はもつべきものと説かれている。なおこの至誠心釈に自力他力を説く章段は『元亨版』以下の版本には削除されている。法然の至誠心釈と大きな異なりのある釈義であるために削除したのであらう。

次に深心について注目すべきことは、信機釈があかす罪惡生死の凡夫をもつて、断善根の闡提としてゐることである。即ち、初めに善導が『観經疏』に説く二種深信の文を出し、その信機釈について、

「初ニ先ツ罪惡生死ノ凡夫、眩劫ヨリ已来出離ノ縁アル事ナシト信セヨト云ヘル、是即断善ノ闡提ノ如キ物ナリ、カ、ル衆生ノ一念十念スレハ無始以来ノ生死輪廻ヲ出テ、彼極樂世界不退ノ国土ニ生ルト云ニヨリテ、信心

ハ発ルヘキナリ」(57～58頁)

と説いて、信機の「機」を断善根の一闡提に類するものとし、かかるものでも一声十声すれば浄土に生るということを聞いておこす信心が深心であるとする。この文で「生ルト云ニヨリテ信心ハ発ル」とあって、「生れると云ふことを聞いて」おこす信心を説いている。いわゆる聞法による信心であって、先の第十七願が

「ソノ名号ヲ往生ノ因トシ給ヘル事ヲ一切衆生ニ遍ク聞カシメンカ為ニ諸仏称揚ノ願ヲ立給ヘリ、第十七ノ願是也」(39頁)

と説く、諸仏称揚の願によって発す信心と考えられる。さらに、この『三部経大意』は仏の本願について、無静念王(阿弥陀仏の本生)と宝海梵士(釈尊の本生)の物語りを記して、無静念王が因位を捨て菩提心を発し、摂取衆生の願をたて、諸仏難化の悪業深重の衆生でも、我名を唱えば必ず迎えると誓われたことを、宝海梵士がこれを聞いて、われ穢土に成仏して、衆生にこれを示し、衆生はこれを聞いて唱えば生死を解脱すること易しという説話を記している。これは、云うまでもなく、阿弥陀仏が摂取衆生の願(第十八願)を立てられたことを釈尊より聞いて、(第十七願)おこす信心が深信ということである。

善導法然の深信釈は自身が罪惡生死の凡夫たることを信じ、かかる罪惡の凡夫が阿弥陀仏の本願によって摂取されることを信ずることであって、直接本願力を信ずることが深信であるが、本書の説く深信は第十七願諸仏称揚願を介して、本願力を深信することを説くところに、この『三部経大意』の深信釈の特色を見るのである。

このように「諸仏ノコシラヘカネタル難化」の衆生を、名号をもって摂取すべく本願を建てられた阿弥陀仏の衆生摂化を説くことをもって本書は釈尊出世の本懐と呼んでいるのである。

次に廻向発願心について、

「次ニ廻向発願心ハ人コトニ具シヤスキ事也、国土ノ快樂ヲ聞テ、誰カ願ハサランヤ」(73-74頁)

といつて、聞法による願生心としている。さらに至誠心積の下において、二河譬を出して、

「何ニ況、廻向発願心ノ積ハ水火ニ河ノ喩ヲ引テ愛欲瞋恚ノ水火常ニウルヲシ、常ニヤキテヤムコトナケレトモ、深心ノ白道タユルコトナケレハ生ル、コトウトイヘリ」(56-57頁)

とあつて、廻向発願心積の下に出づる二河白道の譬喩について、愛欲瞋恚に焼濡される白道と深心の白道の二白道をあかしている。かかる廻向発願心積および二河白道説は法然の語録には見られない説である。

なお、このほかに法然の説と思われないものが見られるが、既に前の論文において指摘したので今は省略することにする。

四、『三部経大意』撰述者の推定

1 本願の釈義について

上述のごとく『三部経大意』に説く本願および三心積は法然の所説と大きな異なりが見られ、金沢文庫本には源空撰なる撰号が見られ、元亨版『和語灯録』所収本には源空作なる表示があるが、到底法然のものと考えられず、法然門下のだれかの述作が誤つて法然のものと思われるに至つたと思われる。しかし五種類の写刊本のうち、親鸞の書写したもののみは撰号作者名なく、法然の語録を書写したという『西方指南抄』にも集録されていない。したがつて、親鸞はこれを法然のものと考えていなかったのだからうか。親鸞は晩年、法然及び門下の隆寛、聖覚等のものを筆写している。これを年代順に示すと次のようである。^⑨

1、『唯信鈔』一卷、聖覚、寛喜二歳(一二三〇)仲夏下旬第五日、書写(親鸞五十八才)

- 2、『自力他力事』一卷、隆寛、寛元四歳（一二四六）丙午三月十五日、書写（親鸞七十四才）
- 3、『一念多念分別事』一卷、隆寛、建長七年（一二五五）四月二十三日、書写（親鸞八十三才）
- 4、『西方指南抄』六卷、源空、康元元年（一二五六）十月、書写（親鸞八十五才）
- 5、『三部經大意』一卷、正嘉二歳（一二五八）戊午八月十八日（親鸞八十六才）

このように親鸞は『西方指南抄』に続いて、書写しているから、親鸞がもし『三部經大意』を法然のものとしているならば、おそらく『西方指南抄』の中に収録したであろう。既に先学によって『西方指南抄』に収められている『三機分別』は法然のものではないと指摘されているが、親鸞が筆写した当時では法然のものとされていたのである。したがって親鸞はこれを『西方指南抄』に収めたものと考え、これを逆に考えて、『西方指南抄』に収められていないということは、少なくとも親鸞は法然のものとは考えていなかったであろう。さればこの撰述者を誰に擬すべきかというに、親鸞が晩年に筆写した書物の撰述人に上記のごとく隆寛と聖覚の二師が見られる。いまこれら二師の著作を見るに、隆寛の『弥陀本願義』（金沢文庫蔵）および聖覚の『四十八願釈』と『唯信鈔』の中に『三部經大意』が説く本願論と類似せる考え、または同じ考えを見出すことができる。

隆寛は法然門下の著名な門人であり、滅後の念仏教団を代表する人であって、上記のほかに『具三心義』二巻、『散善義問答』若干巻等の著作がある。聖覚も同じく法然に帰依した人であって、特に唱導に巧みであったといわれ、洛北安居院に住していたために安居院法印とも呼ばれている。著書に上記のほかに『大原問答鈔』一卷等の著作を残している。

いま『三部經大意』にあかすところの第十二、第十七、第十八願について、隆寛の『弥陀本願義』と、聖覚の『四十八願釈』の説くところを見るに、隆寛は第十二光明無量願を釈して、仏光無辺際願と名づけ、この願について問答

をもうけて、^⑥

「問、光明無辺照ニ十方仏國、為ニ衆生ニ有ニ何益耶。答、弥陀本願以ニ名号ニ、引ニ導群生、光明便名号用也、……当知光明与名号、其体是一也」

と説いて、光明を以て名号の働きのとして、第十二願を衆生摂化の面より解釈している。

さらに聖覚の『四十八願釈』を見るに、第十二光明無量願について、初めに願文を出し、次いで、

「此ノ願ヲハ人師料簡^{シテ}、摂法身^ヲ願ト云ヘリ、……此ノ仏、光明无量ノ願ハ阿弥陀如来ノ我カ身ノ事ヲ願シ御セリ、サレハ為ニ衆生ニ指タル徳分モ无キ様ニ覚ヘ候、情案^{スルニ}之我身事申、真実^ニ為ニ衆生ニ候、大悲御志无^ク止覚候……其別願所成、光明放ニ十方世界、毎念仏、衆生摂取、不^レ捨得^ル意、再^ヒ本願、根元立返、思^フ之、仏光、无量ナラフト云……摂法身願、我御身事願御マセルニ似タレトモ、只大悲、至極^ニ摂^ル衆生ニ御志有、……今弥陀難思之本願、值^ヒ奉^ル、被^レ照ニ別願所成幾許光明、現世^ニ貪欲微薄、瞋恚柔軟、後生^ニ不捨^ル誓願、導^ルレテ、冥途幽闇、不^レ迷、地獄黒闇、猛^ニ不^レ墮、相好弥多、八万四千、一一、光明照ニ十方无量、国土、摂^ル十方世界、直預^ニ来迎^ス事、只是法蔵因中、本願、光明無量、不思議、御力也」

と説いて、諸師が摂法身願とする第十二光明無量願を『観經』に説く「光明遍照十方世界云云」の文意によって、摂衆生願の意に転釈し、現世には「貪欲微薄、瞋恚柔軟」の益のあることを説いている。

この第十二願に対する考えは『三部經大意』が、

「第九真身觀ニ光明遍照十方世界念仏衆生摂取不捨ト云ヘル文有り、濟度衆生ノ願ハ平等^ニニシテ差別有ル事ナケレトモ、無縁衆生ハ利益ヲカ^フル事アタハス、此故ニ弥陀善逝平等慈悲ニ催サレテ、十方世界ニ遍ク光明ヲ照シテ、一切衆生悉ク縁ヲ結ハシメンカタメニ光明無量ノ願ヲ立給ヘリ、第十二ノ願是也」(38～39頁)

と説いて、摂法身願とされる光明無量願を光明遍照の文によって摂衆生願の意に取り扱っていることは『四十八願釈』と同じ考えであるということが出来る。そして『三部經大意』はこれを光明による結縁の願としている。この結縁の願とする言葉は、先の『四十八願釈』や『弥陀本願義』には見ることができないが、『弥陀本願義』が光明をもって名号の用とし、『四十八願釈』が光明による貪欲微薄等の現世の利益をあかしている。しかし浄土往生は名号をもって生因とするのであるから、名号の用とする光明によって現世における貪欲微薄、瞋恚柔軟等の利益のあることを光明による結縁と理解するならば『三部經大意』と『四十八願釈』とは第十二光明無量願については同じ意趣を説くものといふことができる。

さらに第十七願について見るに、隆寛の『弥陀本願義』には

「当知、諸仏同咨嗟為勸進濁世迷徒」

といつて、第十八念仏往生願に誓われた名号を濁世の迷徒に勧進するための願とし、摂衆生願の意にこれを取り扱っている。聖寛の『四十八願釈』には、

「是二名、諸仏称揚願、或摂法身願トモ云ヘリ、此願意、弥陀如来法蔵因位、昔、四十八願ヲ発シ給フ中ニ、阿弥陀仏三世諸仏如来、褒美讃嘆セラレ給ハント云願也、但十方世界諸仏如来、称揚セラレント云フ是、何事ソ、其ヲ可レ得意様、阿弥陀仏設イミシウ第十八願ニ念仏往生、鉢願ストモ名不聞於、称揚人无被思、後ニヤカテサシツ、イテ発ニ念仏往生願、為令称念先サキダテ第十七願十方世界諸仏我名称揚セラレント願御座……但此願至我名称揚セラレントイヘル事、専ラ第十八念仏往生願ヲ発サン料簡ト聞エタリ、……十方諸仏ノ称揚ヲ勸メ給ハ、其国衆生モ弥陀ノ名号ヲ念シテ可レ往生極樂被思食、此願ヲ発シ給ヘル事、甚深不思議之事也」

と説いて、摂法身願とされる第十七願を摂衆生願の意に取りあつかい、第十八念仏往生願を十方衆生に知らしめるために、先立って第十七願をおこし、わが名を称揚して十方衆生に聞かしめるための願としている。また『唯信鈔』にも同じ意趣が見られる。即ち、『唯信鈔』はこの第十七願について、初めに法蔵の五劫思惟の菩薩道をあかし、ついで^⑧。

「たゞ阿弥陀の三字の名号をとなえむを、往生極楽の別因とせむと、五劫のあひだふかくこのことを思惟しおはりて、まづ第十七に諸仏にわが名字を称揚せられむといふ願をおこしたまへり。この願、ふかくこれをこころうべし、名号をもて、あまねく衆生をみちびかむとおぼしめすゆへに、かつく名号をはめられむとちかひたまへるなり、しからずば、仏の御こころに名譽をねがふべからず、諸仏にほめられて、なにの要かあらむ」

とあつて、第十八願の念仏往生願のために第十七願をおこされ、名号をもてあまねく衆生をみちびくために、諸仏称揚の願を建てたまえるという。かかる第十七願の釈義は『三部經大意』に

「次ニ名号ヲ以テ因トシテ衆生ヲ引摂セムカ為ニ念仏往生ノ願ヲ立給ヘリ、第十八ノ願是也、其ノ名号ヲ往生ノ因トシ給ヘル事ヲ一切衆生ニ遍ク聞カシメムカ為ニ諸仏称揚ノ願ヲ立給ヘリ、第十七ノ願是也」(39頁)

とあつて、第十七願に対する理解および第十八願との関係に同じ考えが見られる。

さらに第十三壽命無量願を見るに、『四十八願釈』には、^⑨

淨影大師此願攝法身願……是方便法身即第二報身也、サレバ阿弥陀如来我御身事願マシマシ候ヘハ、此本願人、為ニハサセル用无様覺候、情案スレハ我御身事申、ゲニハ仏御為何条何用有べウ候、実衆生、為覺候、其故担任随類応同ノ化儀ナンドハ壽命長短、国土淨穢、月面如来、住世纔一日一夜化儀也、……然ニ壽命无量御命ニテ利益不尽事思、二本願根深ニ至テハ只是衆生済度悲願也」

とあって、寿命無量のことも衆生済度のための無量であるとして撰衆生願の意に解している。『三部經大意』はこれについて、

「又此願久シテ衆生ヲ済度セムカ為ニ寿命無量ノ願ヲ立給ヘリ、第十三願是也……寿命無量ノ願ハ豎ニ三世ヲ久ク利益セムカ為也」(41頁)

といつて、衆生済度のためなりとして撰衆生願の意によつてこの第十三願を釈している。したがつて『三部經大意』と『四十八願釈』とは同じ考えであることが知られる。

さらに注目すべきことは三字の名号について説くことである。三字の名号とは阿弥陀仏の「阿弥陀」の三字のことと思われる。『三部經大意』はこれについて

「夫三字ノ名号ハ少シト云ヘトモ、如来ノ所有ノ内証外用ノ功德、万徳恒沙ノ甚深ノ法門ヲ此ノ名号ノ中ニヲサマレル、誰カ是ヲ量ルヘキ」(61頁)

と説いて、三字の名号に内証外用の万徳の収まることをあかしている。これは法然が『選択集』において念仏の勝劣難易を論ずるにあたり、

「名号是万徳之所レ歸也、然則弥陀一仏、所有四智三身十力四無畏等、一切内証、功德、相好光明說法利生等、一切外用功德、皆悉攝ニ在阿弥陀仏名号之中、故名号、功德最爲勝也」

とある考えをうけたものと思われるが、『三部經大意』はこれについて『觀經疏』玄義分に出づる名号釈を出し、続いて、

「惣シテ万徳無漏の所証ノ法門、悉ク三字ノ中ニ収マレリ、惣シテ極樂世界ニ何レノ法門カ漏レタル所アラム」といい、さらに

「但シ今、弥陀ノ願意ハ如此サトレトニハアラス、唯深ク信心ヲ至テ唱ル者ヲ迎ムトナリ」と説いて、三字の名号に万徳の収まることを深く信じて念仏すべきことを説いている。

この三字の名号について聖覺の『大原談義聞書鈔』には、

弘願一称者、万行之宗致也、誰不行之、果号三字者、衆徳之根源也、敢忽嘲之」と

といい、『唯信鈔』には法藏比丘の五劫思惟による浄土の建立は衆生を導くためなりといい、次いで、

「これによりて、一切の善惡の凡夫、ひとしくむまれ、ともにねがはしめむがために、たゞ弥陀の三字の名号をとえむを、往生極樂の別因とせむと、五劫のあひだふかくこのことを思惟しおはりて云云」

と説く、「三字の名号をとえたる」とは、ただ「阿弥陀」と唱えるだけでなく、帰命の「南無」と「仏」を付加して、南無阿弥陀仏と称名することであろう。『四十八願釈』にはこの「三字の名号云云」の文字は見出せないが、「弥陀ノ名号ヲ念ス」「名号ヲ称ス」「聞名号」等とあることは三字名号の念、聞、称をいうのであろう。

なお、隆寛の『極樂浄土宗義』中にも、

「疑云三心具足念仏者。必可持禁戒乎、会云、具三種心、唱三字名者、自然備戒行也」といい、また同書に、

偏帰本願、信仏力、唱三字名、乘来迎蓮、心不顛倒、須臾得生、以之名易行而」と説いて、三字の名号を唱えることをあかし、信瑞の『名義進集』には、

「ワツカニ三字ノナヲトナウルヲモテ、決定往生ノオモヒヲ住セム事、定メテ邪見ニテソアラメ」といい、また同書に、

「マタコレ妄想ノナカニ一向ニ三字ヲ唱ル一心ナリ」

とも説き、隆寛の『弥陀本願義』にも

「問 三字名号、其体は何、答……明知、三字名号、其体是実相也」

とも説いて、隆寛、聖覚、信瑞等いずれも三字の名号のことについて詳説している。しかし上述のごとく法然は名号の功德を説いているが、「三字の名号云云」の言葉は見られない。したがって、『三部經大意』の説は法然のものとすることはできないのである。

以上、『三部經大意』に説く本願の考え等について、隆寛の『弥陀本願義』、聖覚の『四十八願釈』、『唯信鈔』等と比較したのではあるが、『三部經大意』に説く本願の考え方は法然の『選択集』等には見られず、隆寛、聖覚等の説の中に同じ考え、類似せる思考形態が見出される。

2 三心釈について

次に三心釈について見るに『三部經大意』は至誠心釈において、

「自利真実ト者、復二種アリ、一者真実心、中ニ自他ノ諸惡及穢国等ヲ制捨シテ、一切ノ菩薩ト同ク諸惡ヲ捨テ諸善ヲ修シ、真実心ノ中ニナスヘシト云ヘリ、此外多クノ釈有り、頗フル我等カ分ニコエタリ」(46頁)

といて、善導が説く自利真実は「我等カ分ニコエタ」ものであつて不可能なことであるといい、さらに自力の至誠心について、

「何況一分ノ惑ヲモ斷セサル罪惡生死ノ凡夫、イカニシテカ、此真実心ヲ具スベキヤ、此故ニ自力ニテ諸行ヲ修シテ、至誠心ヲ具セムトスルモノハ専ラカタシ、千カ中ニ一人モナシト云ヘル是也」(53頁)

とある。聖覚の『四十八願釈』には至誠心について詳細な考えは見ることができないが、第十八願釈の至心釈において、

「第一至誠心者、真実心也、其真実者、不改不動不廢之義也、身子第六住猶退菩薩行、自非斷惑之菩薩難具真実、五濁五苦之凡夫、何具真実云」

と説いて、凡夫は真実心を具することは不可能であるとする。この考えは『三部經大意』の考えと同じである。

次に深心釈について見るに、『三部經大意』は二種深信の信機を釈して、上記したごとく

「初ニ先ツ罪惡生死ノ凡夫、眩劫ヨリ已來、出離ノ縁アル事ナシト信セヨト伝ヘル、是即斷善ノ闡提ノ如キモノナリ」

といつて、信機の機を以て斷善根の一闡提のごときものと判している。聖覺の『四十八願釈』にはかかる説は見られないが、『唯信鈔』には二種深信を釈して、

「よの人つねにいはいく、仏の願を信ぜざるにはあらざれども、わがみのほどをはからふに、罪障のつもれることはおほく、善心のおこることはすくなし、こゝろつねに散乱して一心をうるることかたし、身とこしなへに懈怠にして精進なることなし」

とあつて、自身の罪障に対して深い反省の念を説いている。

かくのごとく、本願の摂化にあずかる機を「斷善根の一闡提のごとき」もの、「罪障つもり善心のおこること少なきもの」とする考えは、その初めを隆寛の教えの中に見出すことができる。隆寛は『三ヶ願ノ事』（仮題、金沢文庫藏）に第十八願の十方衆生を釈して惡人とし、第十八願は惡人往生を誓われた本願と釈している。そして『具三心義』上には、

「心其機者、罪惡生死凡夫為本、蒙其益者、十惡五逆罪人為先、取機既違聖道常途之教相、論益亦非修因感果之道理」

といつて、本願に摂せらる機は罪惡生死の凡夫ではあるが、直接往生の益を得るものは十惡五逆の罪人を先とするの

であるといつて、悪人往生が強く説かれてゐる。したがつて、この『三部経大意』が説く信機斷善根の説は、隆寛、聖覺の教説をうけたものの考えられる。

次に廻向発願心について見るに、『三部経大意』は、

「次ニ廻向発願心ハ人コトニ具シヤスキ事也、国土ノ快樂ヲ聞テ誰カ願ハサラムヤ」(73頁)

とのみあつて、願生心のみを釈して、善導の廻向発願心釈にあかす諸善根の廻向については触れるところを見ない。この「国土ノ快樂ヲ聞テ誰カ願ハサランヤ」というのは深信釈の下に、「一念十念スレハ無始以來ノ生死輪廻ヲ出テ、彼極樂世界不退ノ国土ニ生ルト云ニヨリテ信心ハ発ルヘキナリ」と説く發深信に關係して説かれるものと考えられる。これは隆寛の『具三心義』下に深信と廻向發願心の關係をのべて、

「所以者何、歸_ニ真_ニ實_ニ願_ニ、無疑無慮_ヲ指_シ之名_ニ深信_ニ於_ニ此_ニ深信_ニ中_ニ、起_ニ決定得生之想_ニ、稱_シ之曰_ニ廻向發願心_ニ也」
と説く考えを簡単に示したものではなからうか、聖覺の『四十八願釈』や『唯信鈔』にはこの考えは見られない。

さらに、『三部経大意』は至誠心釈の下に二河譬の説を出している。即ち、

「何ニ況廻向發願心ノ釈ハ、水火二河ノ喩ヲ引テ、愛欲瞋恚ノ水常ニウルヲシ、常ニヤキチャムコトナケレトモ、深信ノ白道タルコトナケレハ生マル、事ヲウトイヘリ」(56～57頁)

といつて、善導が廻向發願心釈の下に出す二河白道の譬喩について、愛欲瞋恚の水火によつて常に濡焼される白道のほかに、深信の白道のあることを説いている。

この二河白道の譬喩に二つの白道を説くは隆寛の説であつて、隆寛は『具三心義』下_④において、自力の行をもつて往生を願う願生心の白道は、常に水火によつて濡焼されて、善心は染汚され功德の法財は焼かれる、これは未だ他力に歸せざるためであるといつて、

「歸^ニ入^{シヌル} 他力^ニ之後^{ニハ}、以^テ彌陀之願^ヲ、為^ニ白道^ニ、文相惟明^{ナリ}、學者思而可^レ知^ル」

と説いて、水火に汚染されざる本願の白道を説いている。『三部經大意』はこれを深心の白道と説いているが、この主意は同じものと考えられる。

以上、本願とくに第十二、第十三、第十七、第十八、第十九の諸願と三心釈について、『三部經大意』が説くところ、聖覺の『四十八願釈』、『唯信鈔』、隆寛の『弥陀本願義』、『具三心義』等の所明について比較したのであるが、本願の釈義については『三部經大意』と『四十八願釈』、『唯信鈔』に同説、または類似せる教説が見られ、三心釈に關しては隆寛の『具三心義』の説に同じものが見られる。

したがって、この『三部經大意』の述作者はこれら兩師の考えをうけた人と考えられ、『金沢文庫本』や『元亨版』に記述されているごとく、法然のものとはすることはできない。

されば、本書の述作者をだれに擬すべきかというに、隆寛、聖覺の兩師を崇める人に信瑞（一二七九）が見出される。信瑞は『明義進集』において、

「上人（法然）ツネニノタマヒケルハ、吾ガ後ニ念仏往生ノ義、スクニイハムスル人ハ聖覺ト隆寛トナリト云云」

と記している。はたして信瑞が記すごとく、この兩師は法然滅後における念仏往生義の代表者とすべき人であろうか。

聖覺は上記のごとく藤原澄意の子であつて、出家して叡山竹林房靜嚴に天台の教觀を学び、とくに唱導に巧みであつたといわれる。法然に歸依し、建保二年（一二二四）正月二十五日、法然の三回忌にあたり、洛東真如堂にて道俗をあつめて七日間の別時念仏を修したといわれている。著書に上記の『四十八願釈』五巻のほか、『黒谷源空上人伝』一卷、『大原問答鈔』一卷、『唯信鈔』一卷等のものがある。

隆寛は藤原資隆の子であつて、出家して伯父にあたる皇円について天台教學をうけ、横川戒心谷にあつた学僧であ

るばかりでなく、青蓮院慈円とも和歌を通じて親交のあった人である。法然の念仏に帰依したが、『極楽浄土宗義』下の終りには、

「就^レ中隆寛、昔住^ニ楞嚴院^ニ、忝^ニ酌^ム彼遺流^ニ、今雖^モ入^ト浄土一門、所^レ仰專在^ニ惠心^ノ古風^ニ、然惠心^ハ真^ニ慈惠^ニ、師資、義趣定^テ以無^レ違歟」

とあって、法然に帰依した後にあつても惠心の古風を崇めた人である。法然より『選択集』の相伝をうけ、嘉祿の法難にあたり念仏の帳本人として流罪になった人であるが、聖寛、隆寛ともに『七ヶ条起請文』には署名なく、法然門下において客分のごとき地位にあつた門人と思われる。

上來しばし論述したごとく、両師ともに法然の考えとは異なつた本願論、三心論をとなえている。したがって、この両師の考えをうけたと思われる人に、この『三部經大意』の撰述者が考えられる。よつて信瑞が「吾ガ(法然)後ニ念仏往生ノ義、スクニイハンズル人」といつて、法然より信賴された人として両師を崇めているから、両師を崇める信瑞または信瑞に近き人に『三部經大意』の撰述者が考えられるのではなからうか。

信瑞には上記のごとく『明義進行集』三卷のほかに『広義瑞決集』五卷等の著あり、『明義進行集』は末尾に自身の考えを述べて、法然の称名が無観称名なることを説きあかしているが、その中に「阿弥陀如来法蔵比丘ノ昔シ、成就衆生ノ行ヲタテ給ヒシ時、惣シテハ罪惡深重ノ類ヒ、別シテハ濁惡愚鈍ノ族、生死ノ尽期无ラム事ヲカナシムテ其ヲ救ハムカ為ニ云云」と記して、阿弥陀仏の本願を成就衆生の面より説くところが見出せるが、その他のことは本書では見られない。また『広疑瑞決集』は初め第十八、十九、二十の三願について釈しているが、『三部經大意』の本願釈とは異なる。信瑞は信空、隆寛に師事した学匠であるが、聖寛との関係はあきらかでない。まして「方今末学ノ異義ヲタ、ムカ為ニ先哲ノ微言ヲアツム」といつて『明義進行集』を述作した人であるから、源空撰なる名を借る偽

書を著わすとは考えられない。したがって、『三部経大意』は信瑞に近き人、しかも『三部経大意』が唱導的立場で記述されている点から考えて、聖覚と何等かの関係をもつ人によって述作されたのでないかと考えるのである。しかし具体的にその人名を指摘することは困難である。

五、『三部経大意』（元亨版『三部経釈』）の章句の改変

上述せるごとく『金沢文庫本』は建長二年（一二五四）の書写であり、それより遅れること六十七年に刊行された元亨版『和語灯録』所収本（元亨元年（一一三二）刊）とを比較すると、附録五本対照文のごとく、『元亨版』には数個所に大きな削除改変が見られる。いまその中、注目に価いするもの二、三を対照して出すことにする。

1 第十八願と他の本願

『金沢文庫本』（30頁）	『元亨版』（30頁）
<p>雙卷經ニハ先阿弥陀仏ノ四十八願ヲ説キ、次ニ願成就ヲ明セリ、其四十願ト云ハ法藏比丘世自在王如来ノ御所ニシテ菩提心ヲ発シテ淨仏国土成就衆生ノ願ヲ立給ヘリ。</p> <p>凡ソ其ノ四十八願ハ或ハ无三惡趣トモ立テ、不更惡トモ説キ、或ハ悉皆金色トモ云ヒ、无有好醜トモ誓、皆是彼国莊嚴、往生後ノ果報也、此中ニ衆生彼国ニ生スヘキ行ヲ立給ヘル願ヲ第十八ノ願トスルナリ。</p>	<p>雙卷經にはまつあみたほとけの四十八願とく、のちに願成就をあかせり、その四十八願といふは法藏比丘世自在王仏の御まえにして、菩提心をおこして、淨仏国土成就衆生の願をたて給ふ。</p> <p>おほよそ四十八願にあるいは无三惡趣ともたて、あるいは不更惡趣ともとき、あるいは悉皆金色ともいふは、これ第十八の願のためなり。</p>

この両本を比較して考えられることは、『金沢文庫本』では、四十八願の第一、第二、第三、第四願を出して、この願は浄土に往生したものの果報をあかすものとし、四十八願の中、生因の願とするものは第十八願であるといつて、善導法然の本願論をそのまま記しているが、『元亨版』では第一、第二、第三の願を出し、これらの願（四十七願）は、第十八念仏往生願のためなりという。この「これ第十八願のためなり」という語をいかに解するか疑義のあるところであるが、第十八念仏往生願のために無三惡趣願等の他の四十七願があると解するならば、四十七願によつて第十八願が価値ある生因の願となるという意味にも理解される。これは善導が『觀經疏』玄義分において、第十八願と他の本願との關係をあかして、

「無量壽經云、法藏比丘、在^ニ世饒王^ノ所、行^ニ菩薩道^ニ時、発^シ四十八願^ヲ、一一願言、若^シ我得^レ仏^ヲ、十方衆生、称^シ我名号^ヲ、願^シ生^ニ我國^ニ、下至^リ十念^ニ、若^シ不^レ生者、不^レ取^リ正覺^ヲ」

といつて、四十八願の一行に称我名号下至十念の意ありとし、さらに、この『三部經大意』の下の方に、

「凡四十八願ノ中ニ此願殊ニ勝タリトス、其故ハ彼国ニ若生ル、衆生ナク□ハ悉皆色ノ願モ無有^{（衆生）}好醜等ノ願モ何ニヨリテカ成就セム、往生スル衆生ノアルニツケテ身ノ色ロモ金色、好醜アル事モナク、五通ヲモエ、三十二相ヲモ具スベシ」（30～31頁）

とあつて、善導の玄義分の意趣を受けて説きあかしているが、『元亨版』のごとく改変するならば第十八願のために無三惡趣等の諸願が存在することになつて、第十八念仏往生願の価値が逆の意味にもとられ易い表現となるので、無理な拙い改変といふことができる。

2 願成就文について

『金沢文庫本』（35頁）	『元亨版』（35頁）
<p>諸有衆生、聞其名号、信心歡喜、乃至一念、至心回向、願生彼国、即得往生、住不退転、唯除五逆、誹謗正法、</p> <p>ト云ヘル、是ハ第十八ノ願成就ノ文也、</p> <p>願ニハ乃至十念ト説ト云ヘトモ、正シク願ノ成就スル事ハ一念ニアリト明セリ、</p>	<p>諸有衆生、聞其名号、信心歡喜、乃至一念、至心回向、願生彼国、即得往生、住不退転、唯除五逆、誹謗正法、文</p> <p>これは第十八の願成就の文なり、願には乃至十念とくといへとも、まさしく願成就のなかに一念にありとあかせり、</p>

この両文を比較するに、『金沢文庫本』にあかす「正シク願ノ成就スル事ハ一念ニアリ」の文の「願」を阿弥陀仏の第十八願とするか、「願生彼国」という衆生の「願」とするかによつて、一念の意味が変わるので、この文のみにては十分理解することができず、『三部經大意』を述作した人の意図は計ることができないが、『元亨版』のごとく改変すれば第十八願文の「乃至十念」と願成就文の「一念」とはともに称名と解することができるので、『選択集』に「下至」を釈して「下者下至^ル十声一声等^ニ」という意に解されて、一念十念でも往生できる称名念仏なることをあかすものと思われる。『元亨版』の改変は『選択集』の意をうけた改変と考えられる。

3 十方衆生に対する考えについて

『金沢文庫本』（67頁）	『元亨本』（67頁）
<p>仰、何ニシテカ、ル諸仏ノコシラヘカネ給ヘル衆生ヲハ度脱セシメムト誓ヒ給ヘルソト尋ヌレハ、阿弥陀如来、因位ノ時、無靜念王ト</p>	<p>そもくいかにしてかゝる衆生をは度脱せしめんとちかひ給ふそたとづぬれば、阿弥陀如来、因位の時、无上念王と申して、菩提心を</p>

申セシ時、菩提心ヲ発テ、生死ヲ過度セシメムト誓給ヒシニ、尺迦如来ハ宝海梵土^ニ申シキ、無靜念王^ノ国位ヲステ、菩提心ヲ発シ、撰衆生^ノ願ヲ立テ、我仏ニ成ン時、十方三世ノ諸仏モコシラヘカネ給タラム惡業深重ノ衆生ナリトモ、我名ヲ唱ヘハ皆悉ク迎ムト誓給ヒシヲ、宝海梵土聞畢テ、我必穢惡ノ国土ニシテ、正覺ヲ唱テ、惡業深重ニシテ輪廻無際ナラム衆生等ニ此事ヲ示シ、衆生是ヲ聞テ唱ヘハ生死ヲ解脱セム事甚タ易スカルヘシト、ヲ困シテ此願ヲ発シ給ヘリ、

おこし、生死を過度せしめむとちかひ給ひしに、釈迦如来は宝海梵志と申して、无上念王くのにくらゐをすて、菩提心をおこし、撰衆生の願をおこし給ひし時に、

この宝海梵志も願をおこして、われかならず穢土にして正覺をなりて、惡業の衆生を

引導せんとちかひ給ひて、この願をおこし給ふ也、

この兩文を比較して知られることは、念仏する衆生に対して、『金沢文庫本』では「諸仏ノコシラヘカネ給ヘル衆生」「十方三世ノ諸仏モコシラヘカネ給タラム惡業深重ノ衆生」「惡業深重ニシテ輪廻無際ナラム衆生」といつて、ことさらに惡業深き衆生であることを説いている。これに対して『元亨版』では惡業深重のことが全て削除されている。法然は念仏によつて救済される十方衆生を「大小善惡一切凡夫」といつて、特に惡人往生を強く説くところは見出せない。第十八願文の「十方衆生」を惡人と解するのは隆覺の考えであり、聖覺の『四十八願釈』には、これを解して、「設雖ニ貪窮孤独、無文無法、類ニ称ニ仏名^ヲ即生^ル、設雖ニ破戒无戒、十惡五逆、罪人^ニ唱ニ名号^ヲ即往生^ス」とある文意をうけたものと思われるが、『元亨版』では、これが改変されていることは、法然の意をあらわさんとするものである。

4 衆生撰化について

『金沢文庫本』（33頁）	『元亨版』（33頁）
<p>然ハ只タ本意、下化衆生ノ願ニアリ、今弥陀如来ノ国土莊嚴シ給シモ、衆生ヲ引摂シヤス^③カムカ為也、</p>	<p>しかればたゞ本意は下化衆生の願にあり、いま、弥陀如来の国土を成就し給にも、衆生を引接せんがためなり。</p>

『金沢文庫本』では衆生の引摂が強く説かれているのに対し、『元亨版』ではこれがそれほど強く説かれていない。

『元享版』筆者の改変の後が見られる。

なおこのほかに、上述したごとく『元亨版』では至誠心に対する自力、他力の尺義の全文が削除されている。また『親鸞書写本』には、至誠心釈について、『教行信証』信巻の読み方と同じように読み変えたところがあり、『正徳版』には、他の本（金、親、元、寛諸本）に「釈尊ノ恩ヲ報スルハ是レ誰カ為ナリヤ、偏ニ我等カ為ニ非ヤ」にあるを「釈尊の恩を報するも、また唯この念仏にありと云べく」と改変されて念仏報恩が説かれている。このほかに諸々に改変が見られるが、教義上の相違と思われるものは見出せないで、詳細は対照文の下注に記述するに止める。

以上、これを要するに、この『三部経大意』はその内容より考えるに、法然のものとすることはできない。法然の門人である隆寛、聖覚の説をうけた人のもと考えられる。それが誰か、今にわかに述作者を定めることはできないが、信空および隆寛に師事した信瑞に因縁深き人でなからうか。ことに本書が唱導家の立場にあつての所説であるから、聖覚に関係ある人のもではなからうか。

いずれにしても、『金沢文庫本』には源空撰なる撰述者名を記しているが、これは名を法然に借りる述作であると考えるのである。しかしながら本書は法然の本願念仏思想をひろく一般の人々に説きあかすために著わされたもの

と思われ、そのためか和文体で書かれてあり、さらに仏が本願念仏によって衆生を摂化する面が強く説かれてある。しかし本書は法然の説く念仏とは全然異なったものを説いているのではない。仏の衆生救済という面より法然の念仏思想を敷衍したものと考える。唱導家はつねにかかる立場にあって民衆に念仏を説くものであるが、しかし法然の念仏思想より逸脱したところも見られるからその内容より見て、聖覚に関係ある人の述作と考えてよいであろう。

しかし、『元亨版』に大きな改変が見られることに關して、何人によって文章の改変が行なわれたかは明らかにすることはできないが、改変された処を見ると聖光、良忠と次第する門流のものによって改変されたことが知られる。『金沢文庫本』は法然滅後四十二年の書写であるから、この当時では『金沢文庫本』の伝持者は法然のものとされていたのであろう。しかし、その内容が法然の『選択集』等の考えに相違するために、何人かによって『選択集』の主意に合致するように部分的に改変されたものと思う。それはだれか明らかにすることができない。望西樓了慧が法然の語灯録を集録するについて『和語灯録』の末尾に、

「をよそ二十余年のあひだ、あまねく花実をたつね、くはしく真偽をあきらめて、これを取捨すといへとも、なをやまる事おほからん、後賢かならずたゝすへし云云」

と記しているが、内容より見るに到底法然のものと考えることが出来ないものである。

六、五種類の写刊本の比較対照について

対照する五種類の写刊本とは次のものである。

- 一、『浄土三部經大意』一卷、金沢文庫藏、建長六年の奥書を有する写本の写真
- 二、『三部經大意』一卷、高田専修寺藏、正嘉二年の奥書を有する写本、定本『親鸞聖人全集』第六卷所収の刊本

三、『三部経釈』一卷、元亨版『和語灯録』所収本、写真版、変体仮名にて書かれているために、現代の仮名に改める。なお、漢字には振仮名がつけられているが、特に読み方に注目すべきもののみを記して他は略す。

四、『三部経釈』一卷、寛永二十年、柳馬場二条下町、吉野屋権兵衛の刊本による。片仮名にて書かれてあるので、原文通り片仮名にて記す。

五、『三部経釈』一卷、正徳五年の版本による。全文変体カナで書かれているために、現代の仮名にあらためる。

六、五種類の写刊本は同文のもの、同じ意趣を説くところは上下揃えて記述をしたが、削除されたところは空白とする。

七、表現文句の異なるところは横棒線をして相違を示した。

八、さらに文章表現その他の相違するところは脚注をして、異なることをあきらかにした。

註

① 親鸞全集六の解説によると、親鸞が八十六才のとき書写したものを門人慶信か、或は同名の門侶が筆写したものであろうという。現存のものは親鸞筆写本の転写と考えられるので、一応親鸞筆写本とする。

② 選択集（土川勸学興隆会本、三一五頁）

③ 往生大要鈔（法全、五二頁）

④ 親鸞聖人全集の解題による。

⑤ 拙著、法然浄土教の研究（七四一頁）

⑥ 弥陀本願義（平井正戒著、隆寛律師の浄土教の研究、付録九一頁）

⑦ 四十八願釈（元禄三年四月中旬、河南四郎右衛門、皇都書林永田調兵衛刊、第一冊、三三丁以下）

⑧ 弥陀本願義（平井正戒著、隆寛律師の浄土教の研究、付録一〇二頁）

⑨ 四十八願釈（元禄三年四月四旬刊……第二冊、十丁）

- ⑩ 唯信鈔（親鸞全、第六卷、写伝二、四五頁）
- ⑪ 四十八願釈（元禄三年四月中旬刊、第二冊、一丁）
- ⑫ 大原談義聞書鈔（浄全、一四卷、七五九頁）
- ⑬ 唯信鈔（親鸞全、第六卷、写伝二、四五頁）
- ⑭ 極楽浄土宗義、中（平井正戒著、隆寛律師の浄土教、附録三三頁）
- ⑮ 極楽浄土宗義、中（平井正戒著、隆寛律師の浄土教、附録三六頁）
- ⑯ 名義進行集（古典叢書、二七頁）
- ⑰ 四十八願釈第二（元禄三年四月中旬刊、第二冊、二十二丁）
- ⑱ 唯信鈔（親鸞全、六卷、五五頁）
- ⑲ 具三心義（平井正戒著、隆寛律師の浄土教、附録三頁）
- ⑳ 具三心義、下（平井正戒著、隆寛律師の浄土教、附録一六頁）
- ㉑ 具三心義、下（平井正戒著、隆寛律師の浄土教、附録一八頁）
- ㉒ 明義進行集（古典叢書、五七頁）
- ㉓ 聖覚の著書について唯信鈔以外のものについて真疑がもたれているが、四十八願釈については一応聖覚のものとして取り扱う。
- ㉔ 極楽浄土宗義、下（平井正戒著、隆寛律師の浄土教、附録三八頁）
- ㉕ 広疑瑞決集（大正三年刊、四頁以下）
- ㉖ 観経疏玄義分（浄全二卷、一〇頁）
- ㉗ 四十八願釈、卷二（元禄三年四月中旬刊、第二冊、十六丁）
- ㉘ 和語灯録（浄全九卷、六五六頁）